

月刊 水試ニュース

発行所: 愛知県水産試験場(本場) 平成30(2018)年 11月

508号

サガラム藻場が復活中 — 豊浜・中洲地区の調査 —

漁業生産研究所 栽培漁業グループ

多年生褐藻であるアラム類の繁茂した藻場は、アワビやサザエなど磯根資源の餌場となる他、魚介類の生息場、二酸化炭素の固定による温暖化防止効果など多面的な役割を持っています。しかし、近年全国で衰退が目立ち、愛知県もその例外ではありません。

愛知県のアラム類(サガラム、カジメ)藻場面積は、平成10年に大きく減少しました。平成7年と平成23年の面積を比較すると、伊勢・三河湾では2.37km²から0.38km²と約16%、遠州灘では0.9km²から0.03km²と約3%まで減少していました。原因として、海の温暖化や魚類の食害が挙げられています。

当グループでは平成22年度から農林水産省農林水産技術会議等の予算を得て産学官で藻場造成に取り組めました。豊浜の中洲地先に設置されているのり養殖用鋼管を利用し、サガラムの種をガーゼなどで鋼管に巻き付けて直接増やす方法、成長した母藻から出る種を岩盤に付き易くする岩盤清掃による方法及び食害されにくい藻類であるトゲモクをサガラムの周りに移植する方法について試験しました。

事業終了から6年後となる今年10月、共同研究を行った(株)シャトー海洋調査の協力を得て、試験海域付近(図1)の藻場の状況を調査しました。その結果、平成23年にはほとんど無かったサガラム藻場が、大きく広がる状況(図1)を確認できました。漁業者からも、サザエなど磯根資源が戻ってきたとうれしい声も聞かれました。ただ、魚類による食害痕も多く認められたことから、これからも注視しながら藻場造成に取り組んでいきます。



凡例	被ふく率(%)*
黒	75 < ≤ 100
茶	50 < ≤ 75
赤	25 < ≤ 50
黄	5 < ≤ 25
緑	3 < ≤ 5
青	0 < ≤ 3

*単位面積当たりに占めるサガラムの割合



上左:岩盤、上右:鋼管
下:食害痕のあるサガラム

図1 試験海域近辺のアラム類藻場

図2 サガラムの繁茂状況

今年の貧酸素水塊の動向

伊勢湾・三河湾では、夏季を中心に底層に発達する貧酸素水塊(溶存酸素飽和度「DO」30%以下の広がり範囲)の生物への影響が大きな課題となっています。当グループでは定期的に貧酸素水塊の調査を行い、「貧酸素情報」としてwebサイト <https://www.pref.aichi.jp/soshiki/suisanshiken/0000009720.html> で結果を発信しています(図3)。

今年の貧酸素水塊は、伊勢湾では6月上旬に初めて確認され10月上旬まで確認されました。面積(図4)は8月上旬に最大となりましたが、9月30日に接近した台風第24号の影響により海水の上下混合が起きて縮小し、その後は平年より早く貧酸素水塊は解消しました。

三河湾では6月上旬に初めて確認され10月中旬まで確認されました。貧酸素水塊の面積(図4)は7月下旬に最大となったのち台風や強風の影響により縮小または解消し、面積は平年を下回りました。

伊勢湾は水深が深いことから、貧酸素水塊は台風等の影響を比較的受けにくい状況にありました。一方、三河湾は水深が浅いことから台風等の影響を受けやすいため、貧酸素水塊の縮小・解消とその後の躍層の発達による再形成が繰り返されたと考えられました。

本場 漁場保全グループ

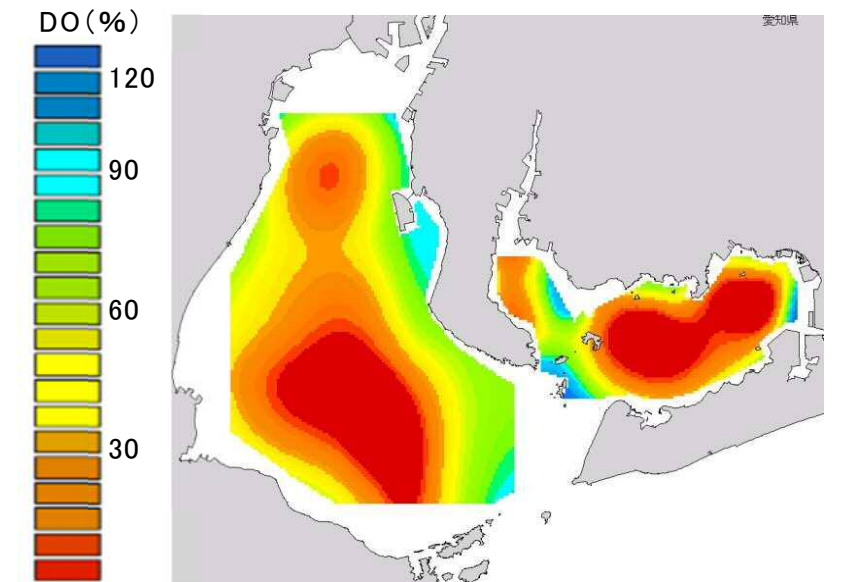


図3 底層DOの状況(7月下旬)

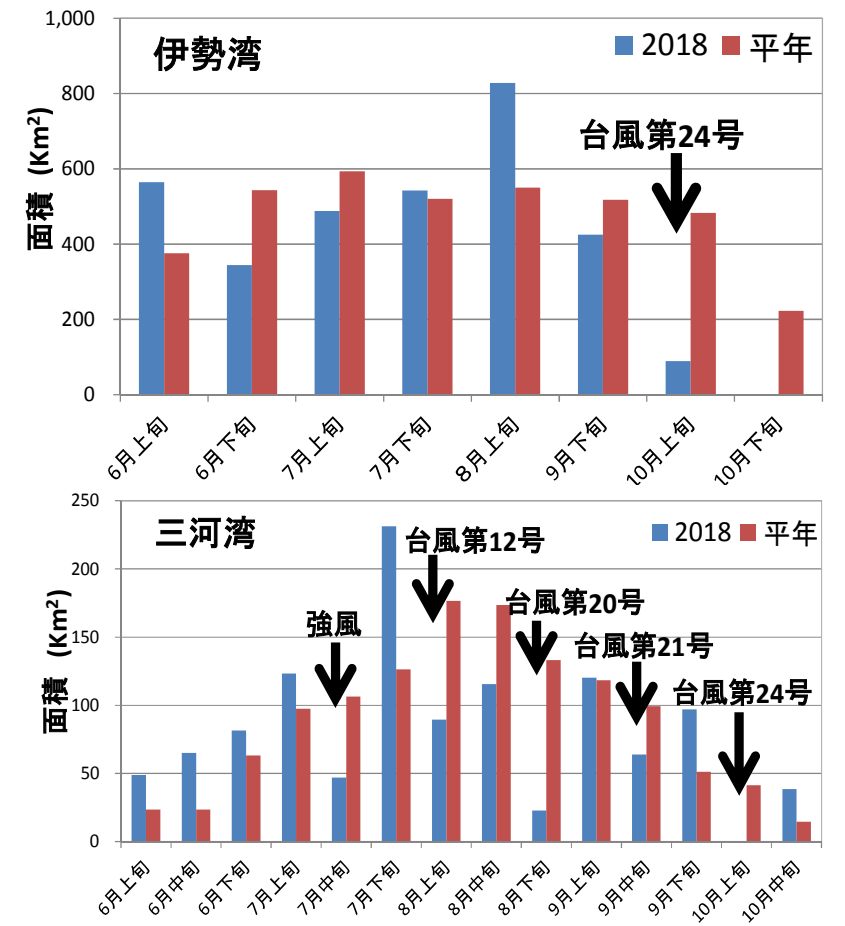


図4 貧酸素水塊の面積の推移

